

西谷啓治名誉教授の御逝去

会告

京都大学名誉教授、文学博士西谷啓治先生は、平成二年十一月二十四日午前六時十五分、脳内出血のため京都市吉田上大路町の自宅において逝去されました。享年九十才。

先生は、大正十三年京都帝国大学文学部哲学科を卒業、昭和十年京都帝国大学文学部助教授となられ、昭和十八年から教授として宗教学第一講座を担当されました。戦後の昭和二十二年、いったん職を退かれましたが二十七年に復帰され昭和三十八年定年退官されました。昭和四十年日本学士院会員となり、五十七年には文化功労者に選ばれました。昭和三十九年には西ドイツ政府の招きでハンブルク大学の客員教授となられ、同大学のほか、ハイデルベルク、マールブルク、ボン大学などで宗教、哲学などを講義されました。

先生の学問分野は形而上学と宗教哲学の兩分野にまたがっており、西田幾多郎、田辺元博士によって開拓された独自の哲学を発展的に継承されました。その「空」の哲学や「ニヒリズム」の主體的究明は、一方では西田博士の絶対無の自覚を掘り下げたものであり、他方では田辺博士の悪や否定の原理を追及したものといわれております。「根源的主体性の哲学」、「神と絶対無」、「ニヒリズム」、「宗教とは何か」など多数の著作に見られますように、先生は七十年に亘る思索を通して人間と宗教との

結びつきを追及し続け、まことに広大にして深遠な独自の思想世界を打ち立てられました。中でも『宗教とは何か』は先生の思索の集大成とされるものであり、英訳、独訳で世界に知られております。また、先生の底知れぬ学識と透徹した高い見識と風格は国の内外を問わず、それに触れるものに深い感銘を与え、文化の真の生きた源泉に目を開かしめるものがありました。そのおびただしい数の論文、講演、講義は『西谷啓治著作集』全二十六巻（創文社）に収められています。ここに謹んで先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。

平成三年三月三十日

京都哲学会

二 白井二尚名誉教授の御逝去

会告

京都大学名誉教授、文学博士、白井二尚先生は、平成三年三月八日、午前二時五十八分、富田病院において、浸出性胸膜炎のため逝去された。享年九〇歳。

先生は、明治三十三年八月、長野県南安曇郡にご誕生、大正一五年京都帝国大学文学部哲学科（社会学）を卒業、同大学院のち大谷大学教授を経て昭和四年四月に京都帝国大学文学部専任講師となられた。爾後、同七年七月に助教、一九九年九月より教授として、社会学講座を担当され、三八年に定年により退官、京都大学名誉教授の称号が授与された。その間、先生は社会学の研究教育に専念され、数多くの後進を育成薫陶され、同時に昭和二年一月より二年間は京都大学評議員、同二年九月から翌年八月までは文学部長として大学の運営と発展に貢

哲学研究 第五百五十八号

献された。御退官後は、大谷大学教授ののち関西大学社会学部教授となられ、同学部初代部長として尽力された。先生の研究領域は、社会学の原理論を基本として人種、民族、国民、地域社会、特に村落等の諸分野に広く亘っている。理論分野では、論文「社会心理的相互作用の過程」をはじめ、「意味連関と現実態」や「他我の了解」等があるが、特に後二者は、先生が京都大学の専任講師時に留学のさい、フライブルクにおいてフッサールやイデッガーの許で学ばれた学的影响が強うかがえる業績である。戦中より研究関心は、社会本質論より民族、国民、郷土などに及び、特に教授になられてからは毎年日本全国各地の村落の実態調査を実施され、その対象は五〇数村に及んだ。同調査は、村落生活の動態を、ゲームインシャフトとしての村落の基本的な集団特性と先生が考えられた「封鎖性と狭小性」の変化にもとづきとらえる類型論的方法に拠る独自のものであった。

多方面に亘る先生の業績のうち、理論分野の主要論文は、『社会学論集』（昭和三九年）に収められたほか、主編著として『日本人の自殺』（同四一年）等がある。後者は、昭和三三年より高坂正顕教授と共に代表された学際的な「人性研究会」による自殺の総合的研究の成果をまとめ編集された書物である。

先生は、京都哲学会のためにも格別ご尽力され『哲学研究』にも「民族の諸規定」（二一八—七）、「民族発達の諸段階」（二二一—五）ほか多数の論文を寄せられ、本学会の経営面にも亘り充実と発展を強く念願してこられた。

若い頃、先生は必ずしも頑健とは言えなかつたようであるが、平素より大へん御元気であり、最近も御高齢ながら夏には郷里の信州で過ごされ、日本アルプスの山々を愛でられた。しかし、平成二年には御奥さまを亡くされ秋には健康を害して御入院。その間暮に、第一高等学

校時に同寮で以来ふかい御親友であられた西谷啓治先生の死去が病床に伝えられ急に気をおとされたようであった。やや高い口調で講義、学会、さらに以文会等の場で熱弁をふるわれ、広く學術の振興に堅実に尽力されてきた先生いまは亡く、痛惜の念一入禁じえない。つつしみ御冥福を御祈り申し上げます。

平成三年三月三十日

京都哲学会

三 会員の御逝去について

左記の会員の方々がお亡くなりになっておられる。本学会への久しい御厚誼を偲び、謹んで御冥福と御遺族の御平安とを祈り申し上げます。（括弧内はお亡くなりの日、最終御勤務先、御遺族の御住所または御墓所。）

木村慎哉

今里孝章

大島康正

木村彰吾

四 京都哲学会委員の異動

京都哲学会現任委員のうち、平成三年三月末日をもって、中久郎氏（停年退官のため）が退任された。また平成三年四月一日付をもって伊藤邦武氏（哲学講座助教授着任のため）、乾敏郎氏（心理学講座助教授着任のため）、藤田正勝氏（宗教学講座助教授着任のため）が新たに委員に加わられた。

五 京都哲学会公開講演会記事

平成元年度及び平成二年度の京都哲学会公開講演会は十一月三日午後一時半から、京都大学文学部第七講義室において、左記の如く行われた。

平成元年度

一、実践と技術

京都大学助教授 西谷 裕作氏

一、芸術と時間

京都大学助教授 吉岡健二郎氏

平成二年度

一、トマスにおける意志の自由と必然について

京都大学助教授 山本 耕平氏

一、読みの精神物理学―周辺視の役割を中心として―

京都大学助教授 荻阪 直行氏

講演会は共に、数多くの会員の方々の出席を得、盛会であった。また、終了後、楽友会館（平成元年度）と京大会館（平成二年度）において、多数の会員が講演者と晩餐を共にしつつ、討論、歓談のひとつをすごした。

六 外国哲学者来訪講演会記事

オットー・ペグラー博士（ポッフム大学ヘーゲル研究所長）

平成元年四月三日於文学部

「ハイデッガーと政治」

ジュール・ヴェユマン博士（コレージュ・ド・フランス教授）

平成元年五月二十七日於文学部

「我々は自由か」

コンスタンチン・ブドゥリス博士（アテネ大学教授）

平成元年九月十六日於文学部

「正義と倫理―共同体と個人―」

ワルター・ビーメル博士（デュッセルドルフ造形芸術大学名誉教授）

平成元年十一月十一日於文学部

「ハイデッガーの芸術解釈」

トム・キャンベル博士（グラスゴー大学教授）

平成二年五月七日於京大会館

「基本的価値と社会的介入」

マーガレット・ウィルソン博士（プリンストン大学）

平成二年九月十日於京大会館

「バックリーとデカルト主義者」

ハンス・フリードリッヒ・フルダ博士（ハイデルベルク大学教授）

平成二年九月二十二日於文学部

「哲学史とは何か」

七 京都大学文学部哲学科卒業論文題目

——平成元年度——

中田 昇行 自然的態度から現象学的態度へ——フッサール『イデーンI』における「還元」の思想——

印度哲学史

清水 由美子 ダクシャ祭儀の破壊

心理学

畔村 勇次 短期記憶における順向干渉—表記形態の変化が及ぼす効果

草間 徹 検索失敗と転送失敗の結合によるブラウザーピーターソン課題での順向干渉の説明

古在 克子 意見収束が同調行動に及ぼす効果

竹本 篤史 往復仮現運動の順応における時間周波数特性

西沢 もえき Informal な関係が formal なリーダー評価に及ぼす影響について

原 義信 写真の有無が記事中の人物評定に及ぼす影響

牧岡 省吾 漢字知覚における migration 現象

松山 弥代 単純接触による対人印象が音楽の魅力に与える影響

森 秀樹 発言順序と発言内容の関連についての考察

吉井 実知子 自分の気に入っている性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果

中村 光博 ポグゼンドルフ 錯視に関する諸実験

吉田 忠則 条件性興奮子の消去が条件性抑制子に及ぼす

哲学

今井 太郎 ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』における「語りえぬもの」について

山下 和也 『純粹理性批判』におけるカントの対象概念

副島 猛 フッサールの知覚表象説批判

伊藤 省三 ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』における命題の理解に関する一主張

土江 洋字 E・フッサール『イデーン』第一巻における意識と構成

和田 尚造 フッサール『イデーン』第一巻に於ける純粹意識の領域

植田 真 ヴィトゲンシュタインの「言語批判」に関する諸問題

重長 聡 実存論的解釈について——ハイデガー『存在と時間』に於ける——

西洋哲学史

小松 貴弘 尊敬の感情について——『実践理性批判』・動機論の研究——

影響について

倫理學

伊東茂治 理想社会と人間像（見田宗介を中心として）

土屋有紀 ジョン・ロックの宗教寛容論——『寛容につ

江口 聡 キェルケゴール「死に至る病」における倫理

川辺陽介 J・ロック「人間知性論」に於ける行為の性

美学美術史學

青山 勝 『判断力批判』の成立

飯尾 由貴子 フェルメール『画家のアトリエ』について—

稲本泰生 七世紀オランダ絵画とフェルメールの風俗画

折橋康雄 棲霞寺阿弥陀三尊像小論

勝山友紀子 デイルタイの詩学——芸術に於ける解釈学的

加藤素明 方法の基礎づけ

斎藤 茂 現代美術と消費社会

松本秀房 プラトン『饗宴』における美のアイデアとエロ

衆報

式について

ヴァチカン署名の間におけるラファエロの様

末永 泉 西洋における「グロテスク」なもの

渡辺 毅 民衆演劇論

秋山圭介 クレン・オルデンバーグに見るポップアートの

青山麻理 P・Mブラウにおけるマイクロマクロ関係の

大杉重男 顕在的—潜在的機能の再検討

尾島 憲 現象学的社会学における「意味」と「生活世

佐々木知宏 社会システム論におけるエントロピー概念の

下村 暢子 シカゴ学派の都市社会学の考察

富樫 まゆき 情報環境論から見たコミュニケーション論の

松本武史 リアリティ構成論の再検討

宮下裕介 自己論の社会学的考察

山下敏男 ゴフマンのアイデンティティ概念に関する考

山脇美香 察——『ステイグマ』を中心に——

鬼塚有紀 現代社会の消費構造に関する考察

加藤 広亮 ゴフマンの役割理論の検討

日本の経営の社会学的研究——終身雇用制を

佐々木 麻 社会学における「自我」の考察

白鳥 義 彦 デュルケムの国家論

塚本 利 幸 分析枠組としての現象学的社会学の可能性と射程

射程

原田 真 吾 R・K マーティンの機能分析の再検討

高田 宜 明 「写真週報」にみる戦時下日本の思潮

宗 教 学

梶谷 真 司 存在論と現象学——『存在と時間』から——

沼尻 正 之 マックス・ウェーバーの『宗教社会学』における「合理性」の問題

ける「合理性」の問題

布施 圭 司 ヤスパースの実存について

近藤 寿 夫 ベルグソンの「方法」について

田中 ゆり子 キルケゴールのキリスト教的ヒロイズム

益 森 直 義 キリスト教と共産主義——解放神学に見る現代キリスト教の課題と展望

代キリスト教の課題と展望

順 佐 史 信 シモーヌ・ヴェーユにおける「労働」について

て

野々垣 賢 彦 西田多郎『善の研究』における「純粹経験」について

について

仏 教 学

苦米地 等 流 『秘密集会タントラ』聖者流における菩提心と実践

八 京都大学大学院文学研究科（哲学系）

修士課程修了論文題目

——平成元年三月——

哲 学

有馬 喜 一 ハイデガールの真理論について

伊藤 均 純粹自我と反省の可能性——フッサールの現象学における——

ハイデガールの哲学について——その立場上の変遷——

戸 島 貴 代 志

変遷——

布施 伸 生 フッサールにおける形相について

倫 理 学

蔵 田 伸 雄 理念的なものとしての道徳法則——純粹実践

理性の批判へ——

八 幡 英 幸 カントにおける批判と歴史

古 田 裕 清 有を問う、とは如何なることか経験知とは異なる哲学の可能性——ハイデガーの場合

なる哲学の可能性——ハイデガーの場合

中 国 哲 学 史

木 島 史 雄 東晋時代に於ける一縉紳の生活——干寶から

見た三国兩晋学術界の状勢——

村 田 浩 董仲舒の災異説

印度哲学史

伏見 試 *Vajapeya* 祭研究

西洋哲学史

浦 英雄 トマス・アクィナスの「善」について

宗 教 学

寺 西 美 佳 マイスター・エックハルトに於ける「真人」の問題

梅 原 久 美 子 初期アウグスティヌスにおける内なる超越と真理の探求

基 督 教 学

竹 田 文 彦 史的アントニオスと古代キリスト教の修道

心 理 学

高 木 浩 人 望ましくない内容の自己開示についての考察

石 田 正 浩 痕跡条件づけ事態におけるハトのサイン・トッキング行動に対する Gap-Fill の効果

社 会 学

金 子 雅 彦 P・M・ブラウのマクロ構造理論の検討

鎌 田 大 資 H・S・ベッカーの「芸術世界」論——職業

社会学からのアプローチ

永 谷 健 G・ジンメルの社会認識における「系列」の交錯

野 田 浩 資 E・C・ヒューズの「仕事の社会学」の検討

高 曉 東 マーソンのアノミー論の再検討

小 川 伸 彦 デュルケームにおける儀礼論の検討

美 学 美 術 史 学

上 村 博 時間と感性——ベルクソンの美学思想について

喜 多 村 明 里 ピエロ・デルラ・フランチェスカ『キリスト

洗礼』をめぐる諸考察

中 林 和 雄 ワンリー・カンデンスキのバリ時代の作

品について

西 田 兼 グスタフ・クリムトの寓意画

九 博士後期課程学修者氏名

——平成元年三月——

哲学……白旗優

中国哲学史……宇佐美文理、末岡宏

西洋哲学史……子野日俊夫、古牧徳生

宗教学……石倉順一、仲原孝

仏教学……松田祐子

心理学……奥村朋子

社会学……管康弘、田中紀行

美学美術史学……佐藤理恵、安田篤生

演習Ⅲ 教授 木曾 好能 哲学の諸問題(大学院学生の発
表と討論。大学院学生必修)[院]

西洋哲学史

十 京都大学文学部哲学科講義題目

——平成元年度——

※ 二回生が履修できる専門科目

[共] 大学院と共通

[院] 大学院のみ

哲 学

講義 教授 木曾 好能 哲学概論

研究 助教授 安井 邦夫 現代論理学

” 講師 神野慧一郎 実在論の弁証

” 講師 内井 惣七 論理、数学、科学

” 講師 魚住 洋一 現象学の諸問題

演習Ⅰ 教授 木曾 好能 Hume: A Treatise of Human Nature

演習Ⅱ 助教授 木曾 好能 Martinich: The Philosophy of Language

演習 助教授 西谷 裕作 (倫理学専攻の欄参照)

” 講師 藪木 栄夫 Kant: Kritik der reinen Vernunft

” 講師 藪木 栄夫 Kant: Kritik der reinen Vernunft

” 講師 藪木 栄夫 Kant: Kritik der reinen Vernunft

” 講師 藪木 栄夫 Kant: Kritik der reinen Vernunft

” 講師 藪木 栄夫 Kant: Kritik der reinen Vernunft

” 講師 藪木 栄夫 Kant: Kritik der reinen Vernunft

” 講師 藪木 栄夫 Kant: Kritik der reinen Vernunft

講義 助教授 内山 勝利 西洋古代哲学史概説

” 助教授 山本 耕平 西洋中世哲学史概説

” 助教授 山本 耕平 西洋近世哲学史概説

” 助教授 内山 勝利 ヘラクレイトス研究

” 助教授 山下 正男 中世論理学の諸問題

” 助教授 山田 垣 超越と認識

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

” 助教授 山田 垣 ロマン主義解釈学の諸問題[共]

※

※

※

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

[共]

西洋古代哲学史概説

西洋中世哲学史概説

西洋近世哲学史概説

ヘラクレイトス研究

中世論理学の諸問題

超越と認識

ロマン主義解釈学の諸問題[共]

精神病理学の諸問題

中世の倫理思想

ライプニッツ論理学

Platon: Meno

Aristoteles: Physica I・II[共]

古代哲学の諸問題(参加者の発
表と討論)

西洋古典語学 西洋古典文学専
攻の欄参照)

Lucretius: De rerum natura

Thomas Aquinas: Summa
Theol. I, q. 76, a. 4

Thomas Nagel: What Does It
All Mean?

演習Ⅱ	助教	山本耕平	Thomas Aquinas: Summa Theol. I-II, q. 8, a. 2 [共]	講	師	永ノ尾信悟	ヴェーエダ祭式研究	[共]
演習Ⅲ	助教	山本耕平	Thomas Aquinas: Commentaria in Metaphysica Aristotelis I, I, 1. 12 [共]	講	師	井狩 彌介	ウパニシヤットの諸問題	[共]
演習	講師	中川純男	Augustinus: De Civitate Dei IV, c. 20 [共]	演	習	井狩 彌介	古代インド社会史研究	[共]
"	講師	小浜善信	Thomas Aquinas: De Ente et Essentia [共]	講	師	山崎 元一	『梵語学梵文学専攻の欄参照』	[共]
"	助教	蘭田 坦	I. Kant: Kritik der reinen Vernunft [共]	講	師	德永 宗雄	Bhatsanahita	[共]
"	講師	吉川康夫	F. Nietzsche: Der Wille zur Macht [共]	講	師	矢野 道雄	Brhatsanahita	[共]
"	講師	安藤 正人	Descartes: Les Passions de l'Áme [共]	講	師	内山 俊彦	中国哲学史概説	※
"	講師	藤田 正勝	(宗教学専攻の欄参照) [共]	講	師	内山 俊彦	中国古代理史意識	[共]
講	師	山野 耕治	W. Jaeger: Paideia, die Formung des griechischen Menschen. Bd. III [共]	講	師	池田 秀三	応劬の学問と思想	[共]
"	講師	朴 一功	Platon: Apologia Socratis [共]	講	師	吉川 忠夫	(東洋史学専攻の欄参照)	[共]
"	講師	飯塚 知敬	Anselmus: Prologion C. X II [共]	講	師	山口 久和	章学誠の歴史主義	[共]
"	助手	小澤 和道	Augustinus: Soliloquia II, c. 1. [共]	講	師	後藤 延子	中国近代哲学の諸前提	[共]
印度哲学史				演	習	内山 俊彦	『周易注疏』	[共]
印度哲学史				演	習	池田 秀三	『蔡中郎集』	[共]
印度哲学史				演	習	麥谷 邦夫	神清『北山録』	[共]
印度哲学史				講	師	三浦 秀一	『日知録』	[共]
印度哲学史				講	師	武田 時昌	『論衡』	※
講	師	德永 宗雄	インド思想史 [共]	講	師	德永 宗雄	インド学研究動向	[共]
研究	助教	德永 宗雄	Yogabhasya 註釈文献の研究 [共]	講	師	德永 宗雄	インド学研究動向	[共]

人文研 教授 吉川 忠夫 (東洋史学専攻の欄参照) [共]

講 師 丹治 昭義 中観思想研究 [共]

人文研 教授 井狩 弥介 (インド哲学史専攻の欄参照) [共]

講 師 桂 紹隆 仏教論理学研究 [共]

演習Ⅰ 助教授 御牧 克巳 梵語仏典選集 [共]

演習Ⅱ 助教授 御牧 克巳 チベット語仏典選集 [共]

演習 講 師 榎本 文雄 パーリ語文選 [共]

講 助教授 御牧 克巳 E. Lanotte, *Histoire du bouddhisme indien* 又は E. Frauwallner, *Die Philosophie des Buddhismus*, 或は両方 [共]

基督教学

講 義 教 授 水垣 涉 キリスト教思想の基礎：人間観 ※

研 究 教 授 水垣 涉 信と行 [共]

講 師 片柳 栄一 探求と発見——アウグスティヌス哲学研究 [共]

講 師 稲垣 良典 (西洋哲学史専攻の欄参照) [共]

演 習 教 授 水垣 涉 オリゲネスの聖書解釈学 (De principiis IV 1, 5 から) [共]

講 師 勝村 弘也 モーセ五書講読 [共]

講 師 宮庄 哲夫 Luther: *Vorlesung über den Römerbrief* [共]

講 師 林 忠良 Kierkegaard: *Der Begriff Angst* [共]

助 手 森 哲郎 R. Otto: *Das Heilige* [共]

演習Ⅰ 教 授 水垣 涉 キリスト教学基礎 [共]

演習Ⅱ 教 授 水垣 涉 Donatus -v Pelagius (W. H. C. Friend: *Saints and Sinners in the Early Church*, 1985) [共]

講 助 手 小澤 和道 (西洋哲学史専攻の欄参照) [共]

十一 「日本学術会議だより」内容紹介

第十二号平成元年二月

「総見出し」第14期特別委員会の活動始まる」

「内容項目」第14期の特別委員会、常置委員会、平成元年(一九八九年)度共同主催国際会議、二国間学術交流事業

第十三号平成元年五月

「総見出し」第14期初めて勧告採択される」

「内容項目」日本学術会議第107回総会報告、大学等における学術研究の推進について—研究設備の高度化に関する緊急提言—(勧告)「要旨」、総会中の自由討議—人間の科

学—平成元年度における学術研究集会等開催予定

第十四号平成元年12月

「総見出し」人間の科学特別委員会設置され」

〔内容見出し〕人間の科学特別委員会の設置、ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進について—生命科学と生命工学特別委員会報告、大学等における化学の研究環境の整備について—他学研究連絡委員会報告—〔要旨〕、平成二年度共同主催国際会議、国際社会科学団体連盟（IFSSO）第9大会・総会の日本開催、日本学術会議主催公開講演会開催のお知らせ、日学双書の刊行案内

董仲舒における歴史意識の問題…内山俊彦

宗教的認識と新しい存在……………芦名定道

コミュニオン^①の意義と展開(完)

——ロバートソン・スミスからデュルケムへ——
……………管康弘

書評 Taitetsu Uno (ed.), *The Religious Philosophy of Nishitani Keiji*
……………中原孝

次 号 論 文 予 告

前 号 目 次

同語反復表現に見られる

インダ的思惟の特質……………徳永宗雄

時間空間論における規約主義……………中釜浩一

カントの超越論的観念論

について……………出口康夫